A

あけまして おめでとうございます

平泉澄先生の「母」

幼少の時分に、母に教はつたものの一つは、百人一首である。木版の大きな古い本で……母はその本を読む時も、カルタをとる時も、必ず作者の名から始めたので、私共も名と歌とを一緒にして覚え、それが一生忘れ得ないものとなつた。……

母の教戒のきびしさ、骨身に徹した……「……最も愧づべきは、卑怯であり、臆病である。どんな事があつても、道を避けたり、人に隠れたりしてはならぬ。正しい人間を、神様は見て居て下さるのである」……事を行ふに当つて、狐疑逡巡する事なく、直往邁進して顧みないのも、母の訓戒が肝に銘じた為である。……

（昭和三十三年五月記「母」、『山河あり』所収）

「日本」（令和六年正月号）

正月号巻頭言『平泉澄先生の「母」』解説

平泉先生が昭和五十九年（一九八四）二月十八日、数へ九十歳で長逝されてから満四十年になる。この先生に大きな影響を与へられた方は、同二十年の敗戦間際に、七十二歳で亡くなつた御母堂とみられる。

先生は母上（貞様）のことを、心に染みる名文で書かれてゐる。その一つが前掲の「母」（初出『日本』昭和三十三年六月号）である。この中で外祖父の島田将恕（勝山藩士、のち大野治安裁判所長）が五十歳で急逝されたこともあつて、長女の貞は非常な「苦難を凌いで来た経験」から、「教戒、時に頗る峻厳」であつたが、実は「心やさしい人」だつたと記されてゐる。

また、『山彦』（初出『週間時事』連載）所収の「母」は、いはゆる〝六十年安保〟の昭和三十五年歳末に出てゐる。この中で「人の子が母に求めるのは……一途に子の為に尽してくれる其の純粋の愛情に外ならぬ」が、その「母を忘れ、母を離れて、人は罪の砂漠をさまよふ」ことになる惨状を憂慮してをられる。

それから六十四年後の今日、家庭・家族の関係は、随所で崩壊の淵に陥つてゐる。そこから脱け出すには、自分の両親、とりわけ「垂乳根の母」が日常的に示した恩愛を憶ひ起こし感謝する心を取り戻すことならば、誰にもできると思はれる。

（所　功）

月刊『歴史研究』（令和六年（二〇二四）正月号）

巻頭随想　いま、伝えたいこと（ルビ　こと）

新編『歴代天皇の御製集』に学ぶ

皇學館大学名誉教授　所　功

日本の伝統文化で最も大事なものをあげるとすれば、「和歌」だと思われる。醍醐天皇の勅を承って延喜五年（九〇五）撰進された『古今和歌集』の仮名序（紀貫之作）をみると、次のように記されている。

やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。……力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の仲をも和らげ、猛き武士の心をも慰むるは、歌なり。……

この和歌（短歌）は、『万葉集』の昔から多くの人々が詠み、王朝風の名歌も『百人一首』カルタなどで広く親しまれてきた。その伝統は明治に入ってからも、天皇が新年の「御歌会始」に御題を出して一般国民の詠進を勧められたおかげで、今なお続く正月の雅な宮中行事となっている。

それらは膨大な数にのぼる。歴代天皇の御製に限っても、前近代のものが百年程前（大正十一年）に完成した『列聖全集』の「御製集」（全十二冊）に納められており、また明治以降四代の御製集も各々出版されている。

しかし、それらの全てに目を通すことは、なかなか難しい。そこで、約半世紀前（昭和四十八年）、国民文化研究会の小田村寅二郎理事長が、小柳陽太郎氏の協力をえて、主な御製を精選した『歴代天皇の御歌』を日本教文社から刊行された。

歌の才に乏しい私は、この名著を長らく愛用してきた。それは和歌のお手本としてだけでなく、皇室理解の基本的な史料としてであるが、その恩恵に感謝している。

しかも、同会では、創立七十周年に先立って、小田村門下の四十数名が何年も研鑽を重ね、昨年十月、新たに編著『歴代天皇の御製集』を錦正社から刊行された。

この新書には、古代から現代（上皇）まで、北朝を含めて九十五方の約二七〇首が収められ、各々にわかりやすい解説と語注を加え、関連のコラムが添えてある。また巻頭に小堀桂一郎東大名誉教授の推薦文も掲げられている。

これを約一ヶ月かけて精読し、あらためて学びえたことが多い。日本文化への理解を深めるには、本書を『百人一首』のように繰り返し味読することが望まれる。

念のため、新年一月中旬に催される「歌会始」の御題は「和」。超越い心和む日々を重ねてゆきたい。